

平 2 6 — 中	国 — 1 — 6
-----------------	-----------------------

〔注意〕

答えはすべて、解答用紙の定められたところに記入しなさい。
本文には、問題作成のため、省略や表記を変えたところがあります。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

みなさんは、親があれこれ口を出してくるのを、うっとうしく感じたことはありませんか？ あるいは、耳の痛いことをいつてくる友だちに「放っておいてよ」と思うことがあるかもしれません。

なぜこんな「おせっかい」を焼くのかというと、人間は信頼しんらいに固執こじつするからです。信頼しているからこそ、相手の考えや感じていることに共感したいのです。信頼していない相手と共感したいとは思わないですよ？ それは、人間が信頼できる関係が築ける大きさの集団を作り、その中で共感を育てていったことを見ても、はっきりしています。

1、最近は少し事情が変わってきました。大家族のしがらみや、共同体の人間がおせっかいを嫌きらって、自由を追求した結果、信頼も共感も薄うすまった社会、おたがいに頼たよりあうのが難しい、孤独こどくな集団を作ってしまった。

では、信頼や共感を土台にした、おせっかいを焼きあう社会しやかいに戻もどったほうがいいのかというと、これもまた度が過ぎると、やっかいなことになる可能性があります。

たとえば、だれかと「おいしいね」といいあいながら食事をする、幸せな気分になります。一見共感しあっているように見えますが、味覚は共有できませんから、相手も自分と同じようにおいしいと思っているかどうかは、本当はわかりません。さらにいうと、だれかと何かを共感できる能力に自己満足している面も、少なからずあるのではないのでしょうか。

ですから、共感が過剰かじょうになると、暴力につながることもあるのです。「なんでわかってくれない？」と、共感を強要していることに気づかないまま、愛が憎にくしみに変わってしまうように。①共感きかんは「諸刃しよはの剣けん」でもあるのです。

どうやら共感や信頼が薄まった孤独な社会も、共感や信頼が濃こすぎる社会も、どちらも生きづらそうです。いったい、どうすればいいのでしょうか。

ぼくは、「自然」本来のつきあい方にヒントがある、と考えています。

2、ゴリラのフィールド・ワークをしていて、ぼくがピンチにおちいっても、ゴリラはぼくを助けてはくれませんが。そういう意味ではゴリラは冷たいといえるでしょう。

でも、つきあっていたいけれど、そばにいたいことを許してくれたり、いっしょに遊んでくれたりすることもありません。そういう意味では、とても②懐なつかみが深いのです。

木の洞ほらでぼくといっしょに雨宿りをしたタイタスは、家族が密猟者みつりやうしやに襲おそわれて、父親やたくさんの友人を殺されました。母親や姉さんは別の集団へ移り、ほかの二頭のオスととり残されてしまいました。ようやく乳離れちゅばたをしたばかり、四歳さいのときのことです。彼かれにとっては、人間はどうしたって許せない「敵」のほずです。ぼくらが逆の立場だったら、かならずそう思うでしょう。

3、タイタスは「敵」であるはずの人間のぼくを信頼してくれて、無邪気むじゃぎで無防備な姿をさらしてくれたのです。ほかのゴリラも、仲間が人間に襲おそわれても、敵に対するとは思えない態度で接してくれました。これを「覚えていないからだろう」といつてかたづけける人もいますが、そんなことはありません。彼らは記憶力きおくりきよがとてもいいのです。

それでもなお受け入れてくれる懐の深さは、やっばり、彼らの、あるいは自然の持っているしなやかな力強さゆえではないか、と思うのです。

こういう、冷たくて懐が深い、しなやかなつきあい方を出発点に定めて、人間の社会をどう作っていかばいいか、考えてみたらどうでしょうか。人間は、ある意味ではもつと冷たくてもいいけれど、同時に、他者をもつと受け入れる懐の深さがあってもいい。

平 2 6 中
国 2 6

「受け入れる」ということを、頭で考えると難しいかもしれませんが、ぼくたちのいちばん身近にある自然＝自分の体に聞いてみると、わかりやすいかもしれません。

人間の体には、もともとさまざまな能力が備わっています。自然の中で暮らすことをやめてしまった今、使われていない能力もたくさんありますが、完全に失ってしまったわけではありません。まずは、どんなものなら受け入れられるのか、^③自分の体に聞いてみる。そこからはじめればいいのです。

たとえば、ぼくらは、ケンカの罵声や、工事現場で機械がガチャガチャいう音はうるさいと感じますが、鳥のさえずりや秋の夜長の虫の鳴き声、子どもたちが遊ぶ元気な声をうるさいとは感じません。そういうことは、頭で考える前に、自分の体を感じることで。

自分の体に聞いてみることを意識しだすと、今の社会が、人間が本来豊かだと感じる社会からずいぶん遠くはなれてしまっているということも、これからどんな社会を作っていくのかというヒントも、見つかるかもしれません。

それには、どうしても人間以外の動物がいないとダメなのです。やっぱり^④人間を映し出す「鏡」が必要だというわけ
です。

ゴリラたちは、そのよき鏡になってくれると、ぼくは信じています。

(山極 寿一『ゴリラは語る』より)

(注) 固執……しがみついたり、こだわったりすること。
フィールド・ワーク……野外調査。

問一 1 3 にもっともよくあてはまる語を、次のア～エから一つずつ選んで記号で答えなさい。ただし、同じ記号をくりかえし用いてはなりません。

ア にもかかわらず

イ ところが

ウ たとえば

エ だから

問二 ① 「共感は『諸刃の剣』でもある」のはなぜですか。

問三 ② 「懐が深い」とはここではどういうことですか。

問四 ③ 「自分の体に聞いてみる」とはどういうことですか。

問五 ④ 「人間を映し出す『鏡』が必要だ」とはどういうことですか。

平 2 6 — 中
国 — 3 — 6

□ 次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

終電車の風景

鈴木 志郎康

千葉行の終電車に乗った
踏み汚れた新聞紙が床一面に散っている
座席に坐ると
隣りの勤め帰りの婆さんが足元の汚れ新聞紙を私の足元にかけた
新聞紙の山が私の足元に来たので①私もつけた
前の座席の人も足を動かして新聞紙を押しやった
みんなで汚れ新聞紙の山をけったり押ししたり
きたないから誰も手で拾わない
それを立って見ている人もいる
車内の床一面汚れた新聞紙だ
②こんな眺めはいいなアと思った
これは素直な光景だ
そんなことを思っているうちに
電車は動き出して私は眠ってしまった
亀戸駅に着いた
目を開けた私は③あわてて汚れ新聞紙を踏んで降りた

問一 ——— ①「私もつけた」とありますが、このときの「私」にとって「新聞紙」はどのようなものですか。

問二 ——— ②「こんな眺めはいいなア」と「私」が思ったのはなぜですか。

問三 ——— ③「あわてて汚れ新聞紙を踏んで降りた」とありますが、このときの「私」にとって「新聞紙」はどのようなものですか。

③ 七月のある日、母親がさむらいのかっこうをした男と話しているところを「僕」は目撃します。母親によれば、男はさむらいの幽霊であり、その昔、時代劇の端役をやる新米女優だった母親に一目惚れして下界にやってきたのだそうです。そして、恋におちた二人のあいだに生まれた息子が十三歳になる「僕」なのだと言われます。これに続く次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

おふくろの説明によれば、元和八年五月七日、草之丞が壮絶なる一騎打ちの末にあの世へいった野っ原が、現在のあの、八百屋だったらしい。つまりおふくろはあの日、五月七日の命日に、草之丞の好物をかかえて、いそいそと墓参りに行ったのである。僕は絶句してしまった。

草之丞は、ちかくで見ると思いのほか大きく、なかなかの二枚目だった。肩をいからせて、うつむいている。ひどく緊張しているようだった。もちろん僕も緊張していた。

「二人とも黙っちゃって、どうしたの」
ふしぎそうに言ったおふくろをみて、①どこまで天真爛漫な人だろう、と僕は思った。

「はじめまして」

しかたなく、僕の方から口をきった。

「こんにちは」

ひくい声だった。

「そなたにとっては、はじめましてなのだね。私はいつも、そなたを見ていたのだが」
へんな感じだった。いつも見ていた、なんて気味が悪い。僕はぶっきらぼうにおじぎをして、さっさと部屋にひきあげた。僕は、幽霊の息子だったのだ。

その日以来、草之丞はしょっちゅう僕の前にあられた。幽霊だという立場もわすれて、草之丞はじつに堂々と人前にでるのだ。彼はよく、学校のそばで僕を待ちぶせていた。いきなりとびだしてくるので僕がおどろくと、草之丞はきまっています。

「やっぱりこわいか」

とぼそつと言い、ひっそりとわらう。

草之丞と歩いていると、みんなが僕たちに注目した。しかし、さわいだりこわがったりする人は一人もいない。まさか本物のさむらいだとは思わならしい。それに味をしめて、草之丞はまったくだいたんに街を闊歩した。歩きながら彼はよく唄をうたった。やさしい声をしていた。それが、彼のぶつちょうづらには不似合いだった。

草之丞と僕とは、毎日いっしょに散歩をするようになった。おふくろはますます天真爛漫で、僕らはまるで家族のように、いっしょに食事をし、いっしょにテレビをみた。

十月のある夜、おふくろによばれてふる場に行くと、草之丞が入っていた。

「お父様の背中、ながしてさしあげなさい」

思わずあとずさりした僕の気も知らず、おふくろはにこにこして出ていった。こうして、とりのこされた僕は幽霊と混浴することになったのである。

草之丞のからだは、白くてきれいだった。ふる場の窓からは三日月がみえた。

「そなたは、さむらいの息子がいやか」

湯ぶねにつかっていた草之丞が言った。

平 2 6 中
国 — 5 — 6

「やぶからぼうに」

僕は少しあわてて、②つつけんどんに言った。

「風太郎、そなたはいくつになる」

「十三」

「そうか。もう一人前の男だな」

草之丞はひっそりと笑い、僕は③胸がしわつとした。

十二月。ごちそうと、ぶどう酒と、レコードと、それはまさに、絵にかいたように上出来のクリスマスだった。僕とおふくろは、草之丞に赤いセーターをプレゼントした。草之丞はそれを着物の上からすっぽりと着て、

「これはあたたかい」

と言った。

「すまんことをした。クリスマスに贈り物をするなどという習慣を、まったく知らなかったものでね」とも言った。もちろん僕たちは、贈り物など最初から期待してはいなかった。

おふくろと草之丞はワルツを踊り、僕は踊っている両親をみて、うふふ、と笑った。なぜだか、うふふ、と心から笑わずにはいられなかった。

踊りおわると、草之丞が言った。

「風太郎、今度はそなたの番だ」

もちろん僕は、大あわてでことわった。おふくろとワルツだなんて、じょうだんじゃない。草之丞は、彼がよくする片類だけのひっそりわらいをうかべて、

「そうか」

と言った。

「しかし、これからは子守唄だけでもうたっておあげ。私はもうここにはこないから。れいこさんは、風太郎にまかせる」僕はぎよつとした。まったくつぜんのことだった。今まで心のどこかで感じていた、そのくせ知らん顔をきめこんでいた、④そんな責任がにわか僕の上にふってきた。おふくろはただ立ちつくし、子供のように素直な声で言った。

「行かないでください」

「自然なことです。もう、私は必要ない」

「行かないでください。行かないでください」

おふくろは、ほかの言葉を知らないかのようにくりかえしている。蚊のなくような声だった。僕はどうしていいのかわからなくて、とりあえずおふくろの肩をだいてみた。

「れいこさんをよろしく」

草之丞が頭をさげると、おふくろはようやく観念したらしく、はつきりとした口調でこう言った。

「私が死んだら、この家はお花畑にしてもらいます。そのお花畑のまんなかに、お墓をつくってもらいます。そうしたら、そこでいっしょに暮らしましょう」

草之丞は、ゆったりとわらった。

「では、さらば」

草之丞はきつぱりと言って、ごく普通の人間がするように、玄関から出ていった。そして、それきりだった。

平 2 6 中
国 6 6

これが、草之丞の話のすべてである。⑤おふくろは、今でも毎年、五月になるとあじをかかえて、八百屋の前で手をあわせている。

(江國 香織「草之丞の話」より)

(注) 元和八年……西暦一六二二年。

闊歩……堂々と歩くこと。

問一 —— ①「どこまで天真爛漫な人だろう」と「僕」が思ったのはなぜですか。

問二 —— ②「つつけんどんに言った」のはなぜですか。次のア～エからもっともふさわしいものを一つ選んで記号で

答えなさい。

ア 相手に間違ったことを言われたので、否定しようとしたため。

イ 相手の気持ちを傷つけまいと思って、穏やかにふるまおうとしたため。

ウ 相手の率直な問いにおどろいたことを、悟られまいとしたため。

エ 相手に挑発するようなことを言われたので、冷静になろうとしたため。

問三 —— ③「胸がしわっとした」とありますが、この表現からどのような気持ちが読み取れますか。

問四 —— ④「そんな責任」とはどのような責任ですか。次のア～エからもっともふさわしいものを一つ選んで記号で

答えなさい。

ア 母親を自分が守っていかなければならないという責任。

イ 母親のために子守唄をうたわなければならないという責任。

ウ 草之丞を大人になっても覚えておかなければならないという責任。

エ 草之丞のために自分が成長しなければならぬという責任。

問五 —— ⑤「おふくろは、今でも毎年、五月になるとあじをかかえて、八百屋の前で手をあわせている」とありますが、「今」の「僕」は母親のことをどう思っていますか。想像して答えなさい。

四 カタカナは漢字に直し、全体をていねいに大きく一行で書きなさい。

ヤマのあなたのソラトオク

平26
—
中
国

解
答
用
紙

受験番号
氏名

問一
1
2
3

評 点

問五	問四	問三	問二

問三	問二	問一

問五	問四	問三	問二	問一

--

四

三

二

一